

ボウエンの作品は辛らつな真珠だ。淡々と進む筆致のなかに、謎が、真実が、詩が仕掛けられている。人が殺されたりもするので、その作品は、時にミステリーという名前で括られるが、真の「謎」は、事件のなかでなく、文章そのもののなかにあるといったほうがいだろう。人間を見つめる目は、容赦がないが、それでいて作品全体は、柔らかな光にくるまれている。心底、大人の文学だなど思っていると、英国少女小説の面影が、ふっとわいて出たり。

「いま、いったい、何が起きているのか、いや、すでに何か起きたのだろうか？」  
安易な解答は伏せられている。読者は自立して、全感覚を使い、小説世界を探索しなければならない。ボウエンを読むことの、大きな快楽と孤独がそこにある。

小池昌代

## ボウエン・コレクション

エリザベス・ボウエン 太田良子訳

### エヴァ・トラウト

第1回配本 2008年2月刊行予定  
ISBN978-4-336-04985-8  
定価 2625円(税込)

### リトル・ガールズ

第2回配本 2008年8月刊行予定  
ISBN978-4-336-04986-5

### 愛の世界

第3回配本 2008年12月刊行予定  
ISBN978-4-336-04987-2

四六判・上製 各巻平均 400頁  
平均予価 2500円



装画 勝本みつる  
装幀 名久井直子

お取り扱い書店

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 <http://www.kokusho.co.jp>  
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427 e-mail:info@kokusho.co.jp

## ボウエン・コレクション

全3巻



勝本みつる ジネツラ姫の片付け方

エリザベス・ボウエン  
太田良子訳

国書刊行会

少女という、ミステリー

ウルフ、マードック、レッシングに並ぶ  
20世紀イギリス最高の女性作家  
ボウエンの手によって  
〈少女という奇妙な生き物〉に  
仕掛けられた謎のいくつか、  
あなたに解くことができますか？

ボウエン一流の謎に満ちた長篇三作、  
精選のコレクション。



Eva Trout

## エヴァ・トラウト

無口で大柄、ジャガーを乗り回すヒロイン、エヴァ・トラウト。母親はエヴァを産むとすぐ、愛人と駆け落ちして飛行機事故で亡くなり、コンスタンティンという男とつねに連れ立っていた父親は、のちに自殺し、莫大な遺産をエヴァに残す。巨万の富を手にしたエヴァは、イギリスから飛び出して渡米し、一人の少年を連れてホテルのスイートを転々とする。8年後、少年と共にイギリスに戻ってきた彼女に起きたことは、

第1回配本 2008年2月刊行予定 ISBN978-4-336-04985-8



## The Little Girls リトル・ガールズ

イギリス・ケント州、セント・アガサ女学校に通う三人の少女たち、ダイアナ、シーラ、クレア。好きな詩を暗唱し、水泳とダンスにはげみ、先生は無視してブランコを揺らす。しかし、女学校という楽園は、1914年7月に勃発した第一次大戦とともに終わりをづけ、少女たちは三者三様の人生を歩みはじめねばならなかった。〈リトル・ガールズ〉が〈オールド・ガールズ〉になり、かつての女学校時代に埋めたタイム・カプセルを掘り出したとき、その箱からでてきたものは何だったのか。

第2回配本 2008年8月刊行予定 ISBN978-4-336-04986-5



A World of Love

## 愛の世界

第一次大戦で引き裂かれた恋人たちの物語。リリアは第一次大戦の出征で婚約者のガイを亡くす。彼女は後にほかの男と結婚し、娘のジェインを産む。時は流れ、第二次大戦も終わり、物語のヒロインは、リリアからジェインへ。ジェインは、訪れた母の生まれ故郷で、古い手紙の束を発見する。手紙に書かれたイニシャルはG、ガイの手紙だった。その手紙から、過去のある真実が明らかになり――。

第3回配本 2008年12月刊行予定 ISBN978-4-336-04987-2

エリザベス・ボウエンのこと

太田良子

エリザベス・ボウエンは、『ガリヴァー旅行記』のスイフトや『ゴドーを待ちながら』のベケットと同じくアイルランドに生まれたイギリス人、すなわち文藝の才に長じたアングロ・アイリッシュの作家である。アイルランドにある父祖伝来のボウエンズ・コート・ホステスとして、ヴァージニア・ウルフなど多くの友人を招いてお茶会を開き、母国イギリスでは大戦の暗雲の下で学校生活を送り、さらにドイツ空軍の空襲で自宅を破壊される日々を過ごし、1973年に73歳で他界するまでに長篇10篇と約100の短篇を書いた。カトリックとプロテスタントという名分で反目した二つの国の相克、二度の大戦によって焦土と化した20世紀、ボウエンが描くイノセントな少女たちや、一見優雅な男女が集うカントリー・ハウスは、この二つの現実を映しながら、それでも敗北しない人間がいることを伝えている。失われていくものに宿る勇氣、崩壊するものだけが持つ美など、目に見えない価値を忘れたい映像に仕上げる手腕において、ボウエンの右に出る作家はいない。

エリザベス・ボウエン

Elizabeth Bowen (1899-1973)



アイルランド・ダブリン生まれ。その後まもなくイギリスへ渡る。ヴァージニア・ウルフのほか、グレアム・グリーン等とも親交をもつ。最後の長篇『エヴァ・トラウト』は第2回ブッカー賞(現マン・ブッカー賞)候補となる。邦訳の長篇に、『日ざかり』(吉田健一訳)、『バリの家』(阿部知二・良雄訳)がある。